Jean-Jacques Rousseau et Ermenonville

par Ayaakira OKAZAKI

1. ルソーにおける自然主義と庭園観

1778年5月20日、ジラルダン侯の好意でエルムノンヴィルに移り住むことになったルソーは同年7月2日癩液性卒中のためそこで急逝した。

まる66年のかれの生涯において6週間は時間的にみれば一瞬にすぎないが自然主義に徹したかれにとつて、また四面楚歌の晩年のかれにとつて、エルムノンヴィルにおける旦暮は深い憩いであつたにちがいない。

18世紀をきつてのフランスの大思想家であるルソーについてはあまりにも多くの研究がなされているが、ここにはかれの自然主義に裏打ちされた庭園観をさぐつてみたい。

生後10日で母を亡くした不運はともかく、10才にして父の出奔にあい、わずか13才で従弟奉公に出されたジャン・ジャックの幼少年時代はなんといつても不幸だった。それを後のかれの生活、思想との関連において顧みることむろん大切である。たとえばかれはジュネーヴ郊外のボセーの牧師ランバルシエに、同年の従兄弟とともにあずけられたが、そこでの田園生活が自然への関心を呼び起したことが十分に推定される。ただ著作についてみるかぎり故国ジュネーヴにおけるかれは、いまわれわれの考察の対象とはなりがたい。

1726年に始まるかれの放浪生活、その間に知りあつたヴァラン夫人との共同生活はかれが不朽の著「告白」で述懐しているとおり、生涯を通じての、かれの最も幸福な時期であつたにちがいない。

自己教育のこの期間に作つた「ヴァラン男爵夫人の果樹園」(Le Verger de Madame la Baronne de Warens)はかれのヴァラン夫人に対する讃歌であるが、アカデミアの幻想に満ちているし、シャルメツトでの生活の幸福を歌いあげたものに外ならない。

ルソーにおいては自然はつねにかれの内面の投影であろうが、かれの母なる自然への憧憬の奥にヴァラン夫人の面影が宿つていなかったとはいひ切れない。

とはいえ、自然詩人としてのルソーを伺う上に最も重要な著作は1761年に出版された「新エロイズ」(Julie ou La Nouvelle Héloïse)と、死の直前(1777~78)に書

きあげられた「孤独な散歩者の夢想」(Les Rêveries du Promeneur Solitaire)である。

前者はヴォルマル夫人のクララン邸の庭園の描写を含むものである¹⁾。もともとルソーは庭園にあまり関心をもたなかつたというが、それは当時のフランスの庭園が空前の人工式のあらわなものだつたからである。それらのうちではソーの庭園が気に入つていたというが、ソーには部分的に自然風なとり扱いがあつたからではなからうか。クララン邸の庭園の描写はむろん散文的であり、そこから当時の庭園の姿を厳密に描き出すことはできないにしても、かれは自然風な庭園のあり方に賛詞を惜しんではいないのである。

「孤独な散歩者の夢想」には往年の激情と諦観とが交錯しているが、自然についてとくにふれているのは「第2の散歩」と「第5の散歩」とである。わけでも「第5の散歩」にはかれが生涯のうち最もすばらしいと感じたビエヌ湖の真中にあるサン・ピエール島が描写されている。モティエを石で追われたルソーは、ここにも2か月以上滞在することを許してもらえなつたが、島のただ一棟の家は、かれにとつては正しく別天地であつたとつぎのように述懐している。

「周囲が半里しかないこの小島の家は住みごこちがよく、便利にできていて収税官が家族と傭人をつれて住まつていた。そこには家畜小屋や養魚池があつたが、その大地や眺望は変化にとんでいり。山、ぶどう園、森、果樹園、牧草地があり、水辺に陰影をつくる木立におおわれているが、そこを灌木が縁どつている。なお島には二列に樹木の植わつた高台がつづき、その中ほどには美しい園亭がつくられていて、ぶどうの収穫期の日曜日には近くの湖畔の人達がここに集つてきて踊つたりする。」

風景式庭園はハルバウムにはよれば³⁾

- (1) 自然式
- (2) 前期浪漫感傷式
- (3) 古典式
- (4) 浪漫式

の順で発達したが、ルソーが興味をもつたと思われるのは前期浪漫感傷式のものといえようか。もつともそれはかれがエルムノンヴィルに満足していたことと関連して推定されるだけで、風景式庭園の後期のものを知らずに

逝つたかれであり、また庭園の専門家でないかれが見聞した風景式庭園はごく限られていたにちがいない。しかしそれらはかつての整形式庭園とは対蹠的であり、比べものにならないほど自然の要素を尊重しているという意味で、すべての風景式庭園はかれにとつて歓迎されるべきものであつたろう。

2. ルネ・ジラルダン侯とエルムノンヴィル

マルタン・デカン⁴⁾はジラルダン侯についての詳細な書を著わしているが、劈頭ジラルダンのことを偉大な領主であり、不思議な芸術愛護者であり、田園美に異常な愛着をもつ芸術家でもあると評している。

ルネ・ジラルダンは1735年にパリで生まれ、1808年にヴェルヌイエで死んだ。エルムノンヴィルからは離れているが、死の床でかれの脳裏に去来したものは哲学堂とルソーの墓場のあるエルムノンヴィルの邸宅ではなかつたろうか。

かれの容姿は端正で貴族的であり、当時流行のヴェルテル風の服装をしていたことがグルーズの描いた肖像画(図1)からわかる。

ジラルダン家はもともとイタリア系の家でゲラルディニ(Gherardini)がフランス式のジラルダン(Girardin)に変わったものであり、血からいつても侯が芸術愛好家であり、後世にいう前期ロマン感傷派の情熱家であつたことがよく理解される。

もつとも多くの当時の名門と同じくルネ・ジラルダンも初めは陸軍に入り、ポーランド王、ロレーヌ公スタニスラス・レチンスキーの宮廷付武官となり、大公が亡くなるまで忠実に仕えたといわれる。1761年リュネヴィルでブリジット・ベルトロー・ドウ・ベイ嬢と結婚したかれは男児4人、女児2人に恵まれたが、1765年に生まれた長子スタニスラスは後年「回想録」のなかで父のことや、エルムノンヴィルの所領についての記載を行なつて

いる。前述したように大公の死んだ1766年以降1776年まで10年がかりで、かれは自分の所領となつたエルムノンヴィルに自然式庭園を構築したのである。⁵⁾

余談だが、われわれはここに後年のピュックラーがジ

ラルダンとよく似通つた道を歩んだことを思い出すのである。

エルムノンヴィルの館についてはここには多くふれない。それはわれわれの目標が庭園におかれているためだけでなく、半ば中世に、半ば17世紀に追加されたこの館は建築的にとりたてていうほどのものではないからである。もつとも侯の時代にも補修はされているが、アレクサンドル・ドウ・ラボルドのいうとおり、「エルムノンヴィル城を改良することはできても、その位置をよくすることはできなかつた」のである。

さて庭園であるが、ここは侯によつて新しく構築されたといつてもよい。そして侯がこれをつくるにあたつてルソーの「新エロイズ」に描かれた理念がとり入れられたことが注目に値するのである。

ジラルダン侯の子息の教育はルソーが1762年に著わした「エミール」に基づいて行なわれたといわれるが、八方ふさがりの老年のルソー夫妻をエルムノンヴィルに招いてここに住ませた一事からしてもジラルダン侯がどのようにルソーに傾倒していたかがわかるであろう。もつともジラルダン侯がルソーにはじめてあつたのは1776年のことであり、それも面白いことに、2人をとりもつたのは文学でも哲学でもなく音楽であつたが、ジラルダン侯がそれ以前からルソーの著書を通じてかれに深い尊敬の念を抱いていたことは明らかである。

ルソーがエルムノンヴィルで急逝するやジラルダン侯は悲歎のうちにもすかさず彫刻家のウードンに依頼してルソーのデス・マスクを作らせているが、庭園の上で注目すべきは深夜棺を「ポプラの小島」に移していることである。

以後ポプラの小島は風景式庭園の重要な局部となり、同様の島はルソー島と呼ばれることになつた。たとえばヴェアリツツの庭園にはエルムノンヴィルと見まごう小島が設けられている。

さてジラルダン侯がエルムノンヴィルの領地に展開した楽園は大きく二つの部分に分かれる。

その一つは感傷的ならびに冥想的な風景式庭園(Le jardin paysager, sentimental et philosophique)であり他は田園牧歌的な桃源境(L'Arcadie géorgique et bucolique)である。大まかにいえば池の周辺の比較的細かい手法の平坦部が前者であり、西部の森林に接した小高い部分が後者ということができよう。

ジラルダン侯がこれを築造するに先立つてしばしば外国旅行をしていたこと、そしてとくにイギリスに赴いたことが風景式庭園をつくる上に大きな影響を及ぼしていることは否めないと思う。たとえばウィリアム・ケントがノーフォークの伯爵領につくつたホルカムの居城の庭園、ミロード・コバムの風景式庭園、ならびに詩人ウイ

図1 ルネ・ジラルダン侯
(グルーズ画)

リアム・シェーンストンの庭園内の洞窟、廃墟、瀑、オペリスク、岩山といったもののイメージが後年エルムノンヴィルの作庭に実現されていると考えることができるのである。

「自然が提供するものを受けいれ、自然の拒否するものは保続しないことを知り、それが容易で簡単なものを実行に移すべきである」というのが、ジラルダンの造庭に対する信条であつたようである⁶⁾。

かれの庭園観と外国旅行がエルムノンヴィルを風景式庭園につくり上げる根本的な動機となつたが、その計画が本格的なものにかたまるまでにはモレルの設計、ユベール・ロベールのデツサンが参考とされただけでなく、旅行中すでに何枚かのマスター・プランがかれ自身によつて描かれている。たとえば園内のアルカデーについてエシオードとテオクリットの詩、ヴィルジールの「田園と牧歌」(Les Géorgiques et les Bucoliques) からジェームズ・トムリンの「四季」(Saisons)、かれの友人であつたゲスナーの「田園詩」(Idylle) にいたるまで、そこに描写されたアルカデーが検討されたにちがいない。またペトラルカの「田園詩、1360年頃」、セルバンテスの「ガラテア人」(La Galatée, 1584)、サナツアロの「アルカデー、1480」、フィリツプ・シドニーとマリー・ドゥ・パンブロークの「アルカデー、1590」、ヴェガの「アルカデー、1603」、フオントネルの「牧歌の本質論」(Le Discours sur la Nature de l'Eglogue, 1688)、とくに1709年に発表されたアレクサレダー・ポープの「田園風景」とベルニの「フランスの田園、1763」がかれの胸にまぎまぎと浮かび上がつていたにちがいない。かれが当代きつての文学通であつたことからこれは容易に想像されるところである。

ジラルダン侯がエルムノンヴィルの庭園の一部をアルカデーとしたのはこの庭園に桃源境を再現するためであつた。18世紀になつて自然が「再生された」ことは事実であるが、それは華やいだ美しい社交場を提供するためではなく、哲学的、人道的なイデーの化身としてのものであつた。そしてジラルダンのアルカデーはまさしくそうしたものを具現したといえる。

アルカデーの部分に対し、平坦な風景式庭園の部分には冥想の園といえる。この部分の築造にあたつてはジャン・ジャック・ルソーの数多の著述がジラルダンの胸中に一杯にひろがっていたであろうが、わけでも1761年の新エロイズは繰り返し読みかえされたにちがいない。

3. エルムノンヴィルとルソー

すでに述べたとおりルソーはわずか6週間しかエルムノンヴィルに滞在しなかつた。しかもここへ移つた1778年5月20日までこの館を知らなかつたのである。それに

もかかわらずかれと前期ロマン感傷派の庭園の代表であるエルムノンヴィルとの関係の深いのはかれがここにおいて安住の憩いをみただけであり、またかれの霊がここに永眠しているからである。

42日間、ルソーはジラルダン侯とは同じ屋敷の別棟にいたのであり、侯と日常生活をともにしたわけではない。むしろここで冥想し、天然の草花と親しみ、湖上を静かに漕ぎ回るのがルソーの日課であつたらしい。新エロイズに描かれた「千羽の小鳥」を思いながら繁みにむれ遊ぶ小鳥に穀物を与え、また湖上の魚にパン屑を投げ与えることを欠かしたことのないかれであつた。なおその他の動物にもルソーがどのように深い関心をもつたかはジラルダン父子の伝記やベルノーの「エルムノンヴィルの旅」その他の記録について認められる。しかしかれはここに棲息する動物以外のものを飼育しようと考えたことはなかつた。また当時流行の外来の植物をここにもち込みたいとも思わなかつた。けれど自然であるルソーとしては当然のことであろう⁷⁾。ただしその滞在中ルソーはジラルダン侯の子供らと遊び、エミールの論を地で行くほどかれらに深い愛情を示したことがジラルダン夫妻の伝記に残っている。(図2)

「孤独な散歩者の夢想」の著者は上述の二つのパルクの部分だけでは満足しなかつたようであり、庭園をとりまく森林と付近の風景がルソーには大きな魅力であつたらしい。かれはここにいるあいだ常に朝早くから公園とその周辺を歩いたが、夕方には散歩をしなかつたという。なお散策の折よく同行したのは当時12才のアマールであつたらしい。

「孤独な散歩者の夢想」の著者は上述の二つのパルクの部分だけでは満足しなかつたようであり、庭園をとりまく森林と付近の風景がルソーには大きな魅力であつたらしい。かれはここにいるあいだ常に朝早くから公園とその周辺を歩いたが、夕方には散歩をしなかつたという。なお散策の折よく同行したのは当時12才のアマールであつたらしい。

シャーリとエルムノンヴィルのデセールの管理者となつたルイ・ジレのいうとおり、ルソーのここでの6週間の滞在はかれの著作とは直接なんの関係もない。この間に1行の原稿をも認めていないからである。にもかかわらずここでの生活はかれにとつては文字どおり憩いでありまたかれの夢が実現した場でもある。かれがエルムノ

ERMENONVILLE

PLAN DE LA PROPRIÉTÉ DU MARQUIS DE GIRARDIN
(D'APRÈS A. DE LABORDE)

図3 平面図 (ラボルドによる)

図4 中央の池 (筆者、1963)

図5 カスカード (筆者、1963)

図6 ルソー島 (筆者、1963)

図7 哲学堂 (筆者、1963)

ンヴィルに着く数週間前に認めた散歩者の夢想を。

ジャン・ジャツクとともにエルムノンヴィルに移つた妻のテレーズ・ルヴァスールは誰の記事についてみても良妻賢母ではなかつたらしい。かれが生まれた子をつぎつぎと養育院に送つたのもやむを得ない仕儀だつたのかも知れない。

ルソーがエルムノンヴィルに移つてから数日後ヴォルテールが逝去している。84才の高齢のヴォルテールの死がルソーにそれほどショックを与えたとも思えないが、約1か月のうちに18世紀の両巨頭が消えさつたのである。ただルソーがエルムノンヴィルで静かに息をひきとつたのに対し、ヴォルテールは死の床で、なおかれの最後の悲劇「イレヌス」が上演され、それが拍手喝采を受ける光景を思い浮かべていたちがいがあるだけである。

4. エルムノンヴィルの現況と存在の意義

ルソーの死後、ジラルダン侯はそのパークをルソーの好みに応じて手入れを続けていつた。ルソーは庭園の整備について何の意見も出したわけではないが、かれの考えはとくに新エロイズを通じてジラルダン侯にはよく理解されていたのである。

エルムノンヴィルは風景式庭園であるから、ジラルダンの時代からみるとかなり変容している。1938年にトゥーリング・クラブの手に移つてから、いちおう整備されはしたが、今次大戦以降管理に万全をはかつてきたとは思われない。

全景はラボルドの平面図(図3)のとおりであるが、西方の林相などはかなり変化したと思われる節がある。平面図の上半分の東部、池(図4)を中心として風景式庭園の主要部が展開しており、館とはモー——サンリスを結ぶ国道30号線によつて境されているが、これも現状のとおりである。また日本庭園の籬を思わせるような、自然なカスカード(図5)、ルソー島(図6)、数々のグロット、ベンチ、ドルメン、哲学堂(図7)、廃墟等はいずれも健在であるが、それらのあるものはやや位置をかえるか、それ自体の位置が変化しないまでも周辺の樹木、地被植物の消長によつて構築当時とは異なつた様相を示しているであろうことはたやすく想像される。ただしラボルドの平面図を現状と比べて最も注意しなければならないことは、上記のポイントとなるものが全園にわたつていまでも散在している事実である。後のデツサウ近くのヴェアリツツの庭園と同様、エルムノンヴィルも散策回遊して初めて、その風景式庭園の真価が理解されるのである。すなわち中心的な視点を固定していないのが著しい特色である。わが国の江戸時代の回遊式庭園にも認められるように面積が大きくなれば一視点からの特別の効果を狙うより回遊による観賞を目標において庭園

が設計されやすくなるのは当然かも知れない。大面積の庭園でも、たとえば、フランス式庭園を初めヴィテルボのランテ荘やフラスカティの多くのヴィラの庭園のように観賞の焦点や軸を特定の点または線に固定しているものも少なくないのである。それは整形形式園に対して風景式庭園のもつ一般的傾向といえるかも知れないが、風景式庭園のなかにあつてエルムノンヴィルがヴェアリツツなどとともに主張されなければならない点は、視点が分散しながらも、それが抑揚の少ない連続体とはなつていないことである。たとえばレプトンの「レッド・ブックス」のなかの設計図には全園が風景式園として一つの美しい連続体を構成しているものが多いが、そうしたアクセントのない連続性はエルムノンヴィルにはみられない。その他の技巧はまるで異なるが、エルムノンヴィルやヴェアリツツなどが他の型の風景式庭園よりもわが国の回遊式庭園のあるものと共通の理念をもつていと筆者が主張したいのはそのためである。またそれが前期ロマン感傷派と呼ばれる風景式庭園の一つの特性なのではなからうか。

ブテイ・トリアノン、ランブイエ、パルク・モンソーには風景式庭園の実態または名残りが歴然であり、その他にも部分的に風景式園につくりかえられた庭園はフランスにもいくつか残っているが、ルソーのイデーが端的にそこに生かされたエルムノンヴィルの庭園は前期ロマン感傷派の代表作としてフランスといわず、ひろくヨーロッパの風景式庭園の歴史において重要な位置を占めるものである。

参 考 文 献

- 1) Rousseau, J. J. : Julie ou La Nouvelle Héloïse, Lettre x, pp. 370
Paris, Garnier Frères, Libraire-Éditeurs 1873
ルソー著、安土正夫訳：新エロイズ(三) 岩波文庫 1961
- 2) ルソー著、今野一雄訳：孤独な散歩者の夢想、岩波文庫 1965
- 3) Hallbaum, F. : Der Landschaftsgarten S. 55ff. 1927
- 4) Martin-Decaen, A. : Le Marquis René de Girardin. 1912
- 5) Ganay, Ernst de. : Les Jardins de France p. 206 1949
- 6) Touring-Club de France : Ermenonville 1962 (?)
- 7) Gromort, G. : L'Art des Jardins II p. 93, 1934

(8頁に続く)

(図板参照) 見様によれば「色」とも読める文字である。余があえて「色」を主張する理由は、この字の出るすぐ前に

「岸より水そこへたていれ又水そこより岸へたてあくるとこなめの石はおほきにいかめしくつつかまほしけれども人のちからかなふましき事なれば同色の石のかと思あひたらんをえらひあつめて大なる姿に立なすへきなり」

とあり、それに続けて

「石をたてへんには先左右の脇石前石を寄たてむとするに思あひぬへき石のかと有を立をきて奥石をは其石の口にしたかひてたつる也」

とあつて、石組の技法について形状から色彩に及んで述べている箇所である。ここでは「乞」などという抽象的な言葉の入る余裕もないほど実地に即した文章だからである。

問題の乞字(左類従本、右谷村本より)

5. むすび

以上余は「こはん」は「乞はん」に非ずして「小半」なり、又「乞」は「色」なりの説を提唱して大方の諸賢の御批判を期待するのである。

註(1) 竜居松之助が最初に唱え、現在は専ら江山正美がこの説を力説

註(2) 森蘊がその著『平安時代庭園の研究』ではじめて唱え、その後田村剛もその著『作庭記』でこの説に同調している。

Résumé

The word 'Kohan' is mentioned in the "Sakuteiki" five times. Hitherto, on its meaning, two different interpretations are put, namely-'Goban' (A checker-board), and 'kowan'-that means 'request'. But I found that they are both mistaken and that formerly it meant 'a quarter'. This is the very word, if applied to the referred passages. In the next place, according to my study of the block letters and the contents of the sentences, I found that 'koi' (乞) was the misreading of Chinese letter 'iro'. (色)

(昭和41年秋季学会発表) (41. 10. 31受付)

(6頁より続く)

Résumé

Jean-Jacques Rousseau et Ermenonville

En France également, il ne reste que peu de jardins paysagers bien que leur histoire soit relativement récente. Pour l'auteur, une des raisons de cette rareté est le fait que les jardins paysagers changent facilement avec le temps, surtout si on ne les soigne pas avec assiduité.

Actuellement, il est encore possible de se rendre compte de l'aspect d'un jardin paysager au Petit Trianon, au Parc Monceau et dans quelques autres jardins. Mais c'est le Parc d'Ermenonville qu'il faut

considérer comme le meilleur jardin paysager de l'époque préromantique en France.

Le Parc d'Ermenonville a été créé par le marquis René de Girardin d'après les idées de Jean-Jacques Rousseau qui était un admirateur passionné de la nature et qui vécut en ce lieu les six dernières semaines de sa vie. Etant le seul jardin où les idées de la Nouvelle Héloïse ont été réalisées, le nom d'Ermenonville est inséparablement lié à celui de Jean-Jacques Rousseau.

(昭和41年 関西支部大会発表)

(41. 11. 20受付)